源氏蒔絵煙草盆

木胎　金銀高蒔絵　研出　付描　平文　幅27.4㎝　奥行17.9㎝　高さ18．9㎝
江戸時代後期（19 世紀）　松井文庫所蔵
肥後熊本藩主細川家 11 代目斎樹公の夫人蓮性院（1785～1861）の遺品

前　面：春の草花（若菜）に花籠
左側面：紅葉に火焔太鼓（雅楽器）

髭台型で、天板に火入れと灰落としをおさめた煙草盆です。各面に『源氏物語』にもとづく文様を、繊細な金銀の高蒔絵で表しています。

それぞれ、『源氏物語』のどの場面を表しているかおわかりでしょうか。

この煙草盆は、細川家 11 代目斎樹公の夫人蓮性院（1785～1861）の所用品で、夫人が亡くなったあと遺品として、松井家に伝えられたものです。

いかにも、大名夫人の持ち物にふさわしい優雅で品格のある煙草盆です。蓮性院は、徳川御三卿のひとつ一橋治済の娘で、11 代徳川将軍家斉の妹にあたり、松井文庫には、ほかにも蓮性院からの拝領品が伝わっています。

さて、この煙草盆の文様が、『源氏物語』のどの場面を表しているか、みていきましょう。

※参考図は、同じく松井文庫に所蔵される「源氏物語図小屏風」です。

前面：春の草花（若菜）に花籠……「若菜上」（わかなじょう、巻三十四）

光源氏40 歳の正月の子の日、夕顔の娘で髭黒大将の妻となっている玉鬘が、二人の息子を連れて源氏と対面し、**若菜**を献上する。

正月最初の子の日には、野に出て小松を引き、若菜を摘んで、宴を催し、長生きを祝う風習があった。

この頃、源氏は皇女三の宮を妻に迎えることになり、紫の上の心痛ははかりしれない。

左側面：紅葉に火焔太鼓（雅楽器）……「紅葉賀」（もみじのが、巻七）

源氏の父桐壺帝の五十賀が紅葉の盛りに行われ、源氏は頭中将と青海波を舞い、その美しさに誰もが見とれていた。御簾の中で源氏を見守る藤壺宮（桐壺帝の夫人）は心中穏やかではない。実は源氏の子を身ごもってしまっていたのである。

右側面：掛軸や冊子……「絵合」（えあわせ、巻十七）

帝の夫人斎宮女御と弘徽殿女御が、左右に分かれて絵の優劣を競う「絵合」を行った。

帝の御前で行われた勝負で、斎宮女御方の光源氏が出した須磨での絵日記が、人々の感涙を誘い勝ちとなる。

背面：御所車に夕顔の咲く家……「夕顔」（ゆうがお、巻四）

源氏が、年上の恋人六条御息所のもとへ通っている頃、夕顔の咲く家に住む女（夕顔）と出会う。ある晩、近くの寺で一夜を過ごすが、六条御息所の生霊が現れ、夕顔は死んでしまう。